

「群青 愛が沈んだ海の色」 ★★★

2009（平成21）年5月22日鑑賞<角川映画試写室>

監督・脚本：中川陽介
脚本：板倉真琴、渋谷悠
原作：宮木あや子『群青』（小学館刊）
仲村涼子／長澤まさみ
仲村龍二（ウミンチュ、涼子の父親）／佐々木蔵之介
比嘉大介（涼子の幼なじみ）／福士誠治
上原一也（涼子の幼なじみ、婚約者）／良知真次
仲村由起子（ピアニスト、涼子の母親）／田中美里
上原和恵（一也の母親）／洞口依子
宮城守（レストランの経営者）／玉城満
比嘉俊介（大介の父親）／今井清隆
比嘉瑛子（大介の母親）／宮地雅子
2009年・日本映画・119分
配給／20世紀フォックス映画

<南風原島は美しいが・・・>

本作の舞台は始めから終わりまで一貫して沖縄の離島、南風原（はえばる）島。実際の撮影は沖縄県の渡名喜（となき）島で行われたらしいが、同級生が主人公の仲村涼子（長澤まさみ）、比嘉大介（福士誠治）、上原一也（良知真次）の3人しかいないという小島だから、もちろん撮影隊が入るのははじめて。本来なら60分のTVドラマで十分まかなえそうな物語を2時間の映画にしたのだから、「群青」というタイトルにふさわしく海の中の美しい様子や、美しい砂浜など南風原島の風景がタップリと盛り込まれている。しかし、いかんせんストーリーはあまりにも凡庸。女1人に男2人の幼なじみという設定は、黒木メイサ、窪塚洋介、陳冠希（エディソン・チャン）主演の『同じ月を見ている』（05年）も同じだったが、ストーリーの面白さは断然『同じ月を見ている』の方が上（『シネマルーム9』179頁参照）。

<物語の核は？>

本作の実質的な物語は、3人が離島での同級生生活に別れを告げるところから始まる。すなわち一也は島でウミンチュの修行をする決心をしたものの、大介は那覇の芸術大学に進学することになり、そして涼子も看護師を目指すため島を出るという設定だ。ところが、涼子と大介が一也に別れを告げるべき18歳の春休み、一也が沖縄の愛の歌『トゥバラマ』を歌ったことによって、たちまち涼子は看護師志望をやめて「ウミンチュの妻もいいかな」と方針転換。なんじゃそりゃ！

そのうえ、その後自然に結ばれたらしい2人は、そのままストレートに結婚したいと涼子の父親仲村龍二（佐々木蔵之介）に申し出たからビックリ。もちろん龍二は一也に対して、「結婚は早すぎる。まず一人前のウミンチュになることだ」と結婚の申し出を却下したが、それは当然。ところが、そんな対応の中で一也が取った行動とは？

<導入部はピアノとサンゴがポイント！>

本作は、世界的に有名なピアニスト森下由起子（田中美里）が病気療養のためグランドピアノとともに南風原島にやってくるからスタートする。そしてウミンチュの龍二が吐く、「芸術っていいもんだな」という全く場違いなセリフをきっかけに、龍二と森下由起子は交際を始め、結婚することに。2人が知り合ったのはピアノの音がきっかけだが、結婚にゴールインできたのは、南風原島では「女のお守り」と言われている宝石サンゴの原木を龍二が命懸けで採ってきたこと。若大将こと加山雄三が歌ったヒット曲『お嫁においで』のラストフレーズは、「サンゴでこさえた紅い指輪あげよう」だったが、南風原島でも女性に対する最大のプレゼントはサンゴらしい。

それはそれでハッピーだったが、由起子は一人娘涼子を産んだ後病魔が再発したため、龍二と涼子を残したままあえなくダウン。

<宝石サンゴって、そんなに大切？>

それから20年後。20年前からほとんど老けてない顔だちの佐々木蔵之介が、長澤まさみ扮する涼子の父親仲村龍二役として登場する。そして龍二は、涼子の同級生一也からの涼子に対する結婚の申し込みを一蹴。その結果起きるのが、龍二と同じウミンチュを目指す一也によるサンゴ取りの執念だ。

いくら南風原島では宝石サンゴの原木が「女のお守り」として大切だとしても、また「素潜りでは俺の方が龍二さんより上」という自信を持っていても、海の底で窒息して死んでしまったのでは元も子もないのでは？日本（本土）の若者も相当バカが増えているが、沖縄の離島、南風原島で一人前のウミンチュを目指す18歳の一也のバカさ加減に私はウンザリ。

さらに、一也を失ったことによって重大な精神疾患に陥る涼子も、一体ナニ？今ドキの女の子ってこんなにモロイの？本作後半のテーマはこんな風に腑抜け状態になってしまった涼子の再生だが、私の興味はこの時点でブツツン状態に。

<大介の帰島の狙いは？>

一也がサンゴを採るため、何日間も深場に潜っている中で死亡してから1年。なぜか一也の葬儀にも戻って来なかった大介が今島に戻ってきたが、那覇の芸術大学はどうしたの？大介は両親の俊介（今井清隆）と瑛子（宮地雅子）と共に島を離れていたから今さら帰る家はないわけだが、当分は父親代わりのような龍二の家に住み、島の伝統的な焼き物を自分なりに完成させたいというのが、彼の言い分。しかし大学2年生になったばかりの大介が自分流で研究すればそんな焼き物が完成するの？そりゃちょっと考えが甘いのでは？

そう考えていると、案の定、ある日大介は自分の真の狙いが涼子にあったと、自分の醜い心のうちを島唯一のレストランの店主宮城守（玉城満）に告白することに。そりゃ、子供時代を含めて延々と描かれたあの微妙な三角関係のありさまをみていると、一也が抜けたことは大介にとってある意味ラッキーであったことは明らかだが、それもこれも含めて本音をぶつけ合わなくっちゃ。どうして今ドキの若い子はこんな風に中途半端なの？

<米大手映画会社の日本進出だが？>

私は長澤まさみ主演の本作は当然東宝の配給だと思っていたが、実はこれは米大手映画会社である20世紀フォックスの配給。そりゃ一体なぜ？

2009年5月25日付産経新聞は「純和風、シネマ 世界に挑む」「【おくりびと】契機/日本舞台相次ぐ」との見出しで、米大手映画会社の日本での製作が本格化していること、そして純和風の小品に20世紀フォックスが目をつけたことを大きく紹介した。日本人俳優と外国人監督が組んだワーナー・ブラザーズの『昂 スパル』(08年)や、ソニー・ピクチャーズの『レイン・フォール/雨の牙』(09年)が相次いで公開されたが、本作は20世紀フォックスがはじめて邦画製作に挑んだもの。「日本が認めた映画は世界で通用する。『おくりびと』がそれを証明した」と20世紀フォックス映画のジェシー・リー日本代表は力説するが、さて本作は『おくりびと』(08年)のような「日本が認めた映画」と言えるの？いくら「世界で経営基盤が最も安定しているのは日本企業です」と言っても、作品の良し悪しはよほど吟味しなければならぬのでは？